



十一期生
ジャンプシュートの思い出

井上晴子

私が始めてハンドボールという球技を知ったのは、高校一年の夏藤井寺で開催された国体の高校のグラウンド持ちをした時の事だった。幸か不幸か持ったグラウンドが準優勝の足利高校のものだった。翻中して見物しているうちに何とスケールの大きい男性的なスポーツなんだろうと思いい、私もしてみたい気持ちになり、思いい、私もハンドボール部に入部したのは一年の冬休みだったと思う。練習の初めの日から、男女混合の練習で初めてのことだから言われる通りにした。二年になるとジャンプシュートの使用が許可され、部員はみんなジャンプシュートの練習を始めた。部員はみんなジャンプシュートの経験もあるのだけれい、なシヤンがシュートをさされるし、同級の人達もすこしいシュートをやるようになったのに、私だけがどうしてもしヤン一人でがっかりしてイミングがつかめず、一人でがっかりして

いた。そのうち先生が私をキーパーに任せてるつもりになられたので、この劣等感から免れるようになった。それにはコートを走り回りたくしてしかたがなかった。キーパーはシュートに対してどこが得意かあるか、不得手であるかというのと、きれいなジャンプシュートをする人のタイミングを覚えるようになった。もし私が、ちやんとしたシュートになったら、身につける経験したことで、キーパーの心理も一応は思いついた。もちろん私は三年生までひきつづきキーパーをする気はなかった。時々体育館の壁にボールをぶつけてジャンプシュートの真似ごとをした。そのうちはどうやらジャンプシュートらしいものが出来た。確か、欲が深いようだが、私自身自身にあつた。独得のスタイルを考えた。確か、確率がよくって肩が弱くて経験を生かして、私はキーパーの少し手前でバウンドして高くボールに入るシュートを選んだ。その頃は三年の中頃で、試合でそのシュートを使えたことを覚えてい

る。ドミヤ降りの中で、今宮高校との練習試合の時だったが、あの時自分のシユートを用いて成功して勝った時のうれしさは、三年間のクラブ生活の最高頂だった。

苦しかつた思い出

浅野朝子

思い起こすと、ハンドボールとか言う競技を初めて知ったのは、確か一年の終り頃だったと思います。同じクラスにハンドボール部に所属しているという人があり、いつか放課後になるとクラブの主たる人物と思われ、女性が一二人、日練習に参加するようになり、とくにうみをかせにやってくる。するとその度に、彼女はいやな顔をしながらも承知していた。ある日何となく彼女に「ハンドボールでどんなことをするの」と聞きました。彼女曰くには、「ヨ走り乍らボールを投げたり、うけたり、キーパーにとられたいように、ゴールに投げ込んでりするのよ」と教えてくれました。これに私にとって、漠然とハンドボールについて知識を得た最初でした。彼女が「これにやめたそうだが」というふうにして、内にはウイスターズと引っぱ

り出されました。その時のコートは現在男子が行っているフイールドだった。そこで一年生の私達は、夢中で広いグラウンドを走りまわっていました。

試合後、男女クラブの多分二年生の幹部の人達にクラブへの勧誘で、私達三人程さんざん追いかけてくれました。二年生になるには、入部してしまえば、二年生になる。とすぐにバトンが移され、新三年生は引退私達三人には、必然的に部長等の役が定められ、初めはどうすることも出来なかつた。あわてて新入生の勧誘に必死になつた。二、三人、ハンドボールというものが他のスポーツに比べて余り知られていなかった。それか、新入部長の勧誘が如何に困難であるか、その立場になつて始めて勧誘する人達の苦勞がわかり、ふと自分達の頃を思い出し、苦笑せずにはおれませんでした。こういう気持ちを出される事でありました。もうとにか、私達の時代には、一チームにも福はない状態だった。技術上達そのものより、クラブ自体を継続していくだけで精一杯でした。なにしろ、三人の練習が、しぼしぼです。から華々しい対外試合等というものは、いくら思い出し、結局うとして、も導かんできません。時には雨の中、全く